

都市近郊の離島におけるライフヒストリー研究 - 共同体とその役割はいかに形成されるか -

上村 浩一

北九州大学文学部人間関係学科

要 旨

藍島とは、北九州市の小倉近郊に位置する離島であり、浜崎俊和氏は、島在住の今年70才になる老人である。私が浜崎氏に注目した理由は、実に多彩な肩書を持っており、さらに彼が昔からの島の住人ではなく、15才の時、母親の再婚に伴って島に渡ってきた連れ子であるという点による。

小さな共同体では、人間関係は狭く血縁などのより深い結びつきが重要な意味を持つことが多い。実際、藍島でも古くからある家が共同体の運営に関する政治的な力を持っており、村の中心的役割を果たしていた。母親の連れ子として島に移り住んだ浜崎氏は、そのような島社会にいかにしてとけこんでいき、そしてどのような変遷を経て現在の地位を築いたのだろうか。

そこで、浜崎氏が生まれてから島に来るまでのこと、それからの島での生活、結婚、仕事、彼の人生観などを手がかりに浜崎氏のライフヒストリーを作成した。

彼の仕事の変遷を追ってみると、そこにはひとつの共通点が見えてくる。それはすべてがいわゆる公的機関に準ずるような内容を持っており、資格などの問題もあって、誰もができる仕事ではないということだ。

また芸能のなかった村のために始めたアコーディオン演奏や、年に十数回をこえるマラソン参加など、趣味やスポーツにおいてもかれの独自性はおおいに発揮される。

すなわち「誰もやらない独自性を追求すること」、「自分の役割を人々に認識させること」この二点によって浜崎氏は、島社会のなかで人々の信頼をえながら、確固たる地位を築いてきたのである。

目 次

はじめに

第1章 ライフヒストリーについて

第2章 藍島

第3章 浜崎俊和氏のライフヒストリー

3-1 浜崎氏の生い立ち

3-2 浜崎氏の日

3-3 芸能、スポーツなどにおける浜崎氏の活動

第4章 他の十七軒の有力者

4-1 上村博利氏

4-2 佐野清一氏

4-3 森本一秀氏

4-4 島社会における人間関係

考察

はじめに

藍島馬島郵便局長、藍島危険物保安監督者、藍島走ろう会会長、小倉教育賛助会員、郵便切手類販売者組合員、小倉海交会員、これらはみな浜崎

俊和氏の名刺に書かれた肩書である。藍島とは、北九州市の小倉近郊に位置する離島であり、浜崎俊和氏は、島在住の今年70才になる老人である。本稿では、浜崎氏の生い立ちから現在までを追

い、彼のライフヒストリー（生活史）を完成させることで、都市近郊の離島の生活と人間関係、また島における彼の生き方を映し出していきたいと考える。

私が浜崎氏に注目した理由は、最初に挙げた様な肩書を持っているという点に加えてもうひとつある。それは彼が昔からの島の住人ではなく、12才の時、母親の再婚に伴って島に渡ってきた連れ子であるということだ。人口400人ほどの小さな共同体では、人間関係は狭く血縁などのより深い結びつきが重要な意味を持つことが多いと思われる。実際、藍島でも古くからある家が共同体の運営に関する政治的な力を持っており、村の中心的役割を果たしている。母親の連れ子として島に移り住んだ浜崎氏は、そのような島社会にいかにしてとけこんでいったのだろう、そしてどのような変遷を経て現在の地位を築いたのか。

そこで、浜崎氏が生まれてから島に来るまでのこと、それからの島での生活、結婚、仕事、彼の人生観などを手がかりに浜崎氏のライフヒストリーを作成することにした。連れ子というかたちで、いわば共同体の外部から島社会に入り、さきざまな経験をしながら、今や島の中心的人物となった浜崎氏のライフヒストリーは、藍島というひとつの共同体のあり方を考える上で貴重な資料となるはずである。

第1章 ライフヒストリーについて

はじめにこの論文で用いるライフヒストリーという方法論について述べておきたい。ライフヒストリーとは、字の如く個人の人生の歴史、記録である。その点では、集団の特性をつかむ社会調査法とは対極をなすものだと言える。しばしば社会調査に使われるアンケート調査は、ある集団の個人に対して、一様に統括的に行われる調査であり、

個別性は持たない。つまり、アンケートのやり方では、1つの個に注目し、多様なアプローチを試みるということは困難であるといえる。アンケート調査の用紙を見れば明らかであるが、個人の意見を幾つかの型に当てはめようとし、ここで個性は消し去られる。

もちろん、こうした社会調査は、ある集団の傾向をとらえる上で重要であり、いまでも社会学の世界では主流であることは言うまでもない。しかし、人類学の世界に半世紀ほど遅れて、社会学を志す者の中にも個人に焦点を当てたライフヒストリーを用いる研究者が出てきた。その代表が、「ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民」（エートマス・F・ズナンエツキ）「社会学的想像力」（C・Wミルズ1959）、日本では、中野卓が1977年に発表した「口述の生活史」である。これらの論文は、個のパースペクティブ、すなわち、価値観、体験などを通して、ある社会全体のルールを導き出している。つまり、小から大を、個人から社会を語ったのである（佐藤1995）。

個人というものは、社会によって規定されるものだというのが、これまでの社会学の主流であった。しかし、ライフヒストリー研究においては、個人と全体は相互に規定するものであって、全体を規定するものである個人が、同時にまた全体によって規定されるものであるという考え方に基づいている（中野1981）。アンケートは、基本的に問われた事柄に対してある一定の枠内で答えるだけだが、口述によるライフヒストリー法には対象者の主体性や個別性がある。もちろん語られるのは過去の出来事だが、それらを語り手が自分の中で消化し、発する時、そこには何かの思い入れや意図、何か伝えたいものなどが含まれてくる筈である。インタビュアーは、その裏側をくみとっ

て、対象者の背後にある社会を分析していくのである。

それでは、ライフヒストリーについて具体的に説明していこう。ライフヒストリーとは、個人の一生の記録、あるいは個人の生活の過去から現在に至る記録のことである。種類としては、口述史、自伝、伝記、日記、手紙、写真、映像記録などがある（谷 1996）。

ところで、そもそもライフヒストリーのライフとは何であろうか、「個人の生活は無限であり、例えていえばたくさんの平面を持つ巨大な多面体のようなものである。したがって、そのすべての面を一度に見渡すことなどとうてい不可能である。かといって、ある一面だけをとらえて、それをその人の人生だと言い切ってしまうのもまた問題がある。」（谷 1996）

以上の点から、ライフヒストリーを作製する者は、対象者にインタビューする際に、ある問題意識を持って行う必要があるが、同時に、それだけにこだわっていると、もっと大事なものを見失ってしまうこともあるので注意が必要だ（谷 1986）。すなわちインタビューのやり方としては、まず聞けるものは芋づる式にどんどん聞いた上で、そこから自分なりに必要なものを取り出し、考えを展開していくべきであろう。

では、ライフヒストリーからその人の人生、また社会全体をどの様に見ればよいのだろうか。鈴木広は、「都市化の研究」の中で、ライフヒストリーを「生活主体としての個人が文化体系および社会構造に接触する相対的なパターン」と述べている。さらに鈴木は、生活主体について解明すべき問題の焦点は2つあると言っており、1つは、主体が何であるか、もう1つは、主体が何をしたかである。もちろんそれら2つは、現時点だけではなく、過去から未来まで幅を持って見るべきであ

る。なぜなら過去と未来は常に連動する関係にあるからだ。個人が最初に参加する社会が家族であるという事実は誰の目にも明らかである。したがって、個人がある文化や社会に参加する際にも、基本的に家族を設定することが出来る（方法的家族主義）。また主体が何であるかについては、性別、年齢、国籍といった生まれつきのものと、学歴、地位といった本人の努力次第で手に入るものによって決定される。また、何をするか側面は、職業を中心とする社会、産業との接触パターンによって強く規定される（鈴木 1986）。

前述の鈴木によれば、このようにして生活主体は、職業を媒介とする産業構造との接合、家族的地位を媒介とする親族、地域構造との接合によって、その基盤が複合的に規定されている。それは言い換えれば、地域社会に参加するためにも家族とのつながりが欠かせないということになる。ここで、生活主体の地位に視点が当てられているのは、それが個人と社会の結びつきの上で重要な役割を果たしているからだと考えられる。人は、集団の一員としての位置（地位）を占めつつ社会に参加し、その過程で自然、物、人、組織、情報などと関わりながら、自らの人生を作り上げている。そのような主体の存在と行為を社会的に最も強く規定しているのが、階層構造と地域構造なのである（谷 1986）。

また、ライフヒストリーにおける〈口述〉の重要性も忘れることはできない。対象者は、例え過ぎ去ったことを語るにしろ、あくまで現在の記憶に基づいておこなう。さらに事実が語られる時、そこには、対象者の内的な自発性が含まれる（佐藤 1995）。

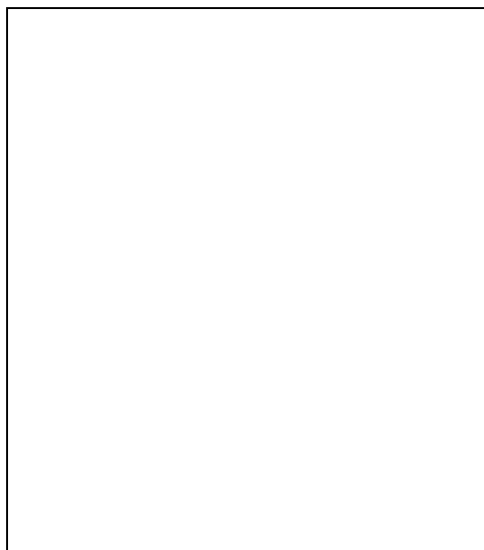
そこで私は、対象者が語る事実はもちろんだが、むしろその口調、言葉ににじみ出る主観などをつぶさに観察しようと試みた。

私が浜崎氏において特に注目した点は、前述した通り、彼の地位と家族のことである。まず、彼の持つ様々な地位、これは島社会に参加するための様式であったのではないかと。そして、彼がいまの地位を築いたのも、外部から連れ子として家に入ったことが大きな要因になったのではないかと。つまり家族への参加の仕方が後の島社会への参加に影響を及ぼしたと考えられるのである。先にも述べたとおり、現在彼はさまざまな肩書きを持つ村の中心的人物である。もちろんその原因として彼自身の能力と性格によるところも大きいですが、それと同時に彼のおかれた社会環境からの影響も無視することはできない。

つまり本論文における私の仮説はこうだ。母親の連れ子として離島の旧家にやって来た浜崎氏は、家族、島社会に溶け込み、参与するために様々な地位を身にまとったのではないかと。

調査は、平成9年7月24日、8月21日、8月27日、9月4日、10月20日、11月7日、11月21、22、23日、12月3日の10回

図1 藍島の地図



にわけて、主に1対1のインタビュー方式で行った。浜崎氏を中心とした数人の島民に、様々な角度から語ってもらった。会話の録音にはテープレコーダーを用い、適宜、メモや写真をとった。また、資料として浜崎氏の収集物(自分史)なども見せていただいた。

表1 土地利用

内分け	面積 (ha)
農用地	12
森林	20
原野	2
道路	4
宅地	4
その他(私有地を含む)	26

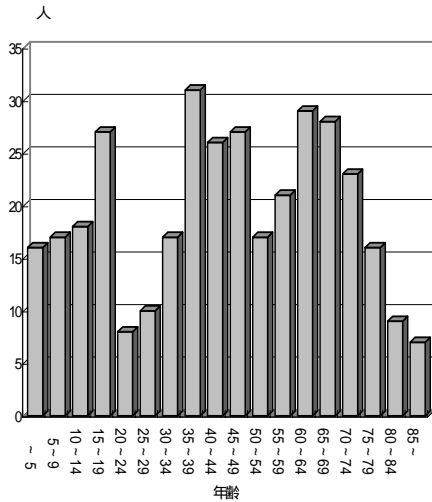
(離島統計年報より作成)

第2章 藍島

藍島は、小倉近郊の響灘に浮かぶ小島である(図1)。小倉から北西に12.3km、定期船で30分程の沖合に位置する。島は南北2.4km、東西は広い所で0.6km、狭い所で0.2kmである。また、海岸線は出入りが多く、干潮時には総延長18.4kmにもおよぶ(吉永1960)。島の大部分は農地と山林でしめられており(表1)住居は本村に集中している。道路は、島を縦断するかたちではっており、燃料、食料などの輸送に利用されている。島の中央部には貝島古墳群をはじめとする古墳45基がある。また、江戸時代には密貿易の異国船進入を防ぐため、異国船遠見番所なるものも設けられた。特に大泊にある遠見番所には石碑がたてられ、今もなおその面影を残している。

1618年、漁師の両羽十右衛門が最初の住人となり、その後現在のような集落が形成されていた(中村1980)。大陸に近いという土地柄が

図2 藍島の人口構成



らか、海賊船や密貿易船を監視するうえでも重要な役割を果たしたようである。

行政の区分は、明治22年板櫃、槻田、中井、馬島、藍島の5ヶ村が合併して板櫃村となり、大正14年、小倉市に編入され、昭和38年に北九州市となっている。

人口の動態については、終戦後は500人を越えたこともあったが、平成9年9月時点で115世帯、347人に減少している(図2)。その原因として、若者の島離れが挙げられる(中村1988)。

もともとは、半農、半漁であったが、現在では漁業が中心であり、(表2)農業は家庭菜園で、米、芋、麦、果実等を作っている程度である。職業構成としては、専業漁業66戸、兼業漁業16戸、自営業1戸、その他18戸となっている(日本離島センター1993)。

漁業の島だけあって、漁業協同組合が大きな役割を果たしている。組合員は90人であり、25

才までの若者は、青年団を結成し、ボランティア活動や地域貢献活動を展開している。また40才までの男子は青壮年部に所属し、全国離島会議などの全国レベルの活動を行っている。

福岡県下にある8つの離島の中でも藍島は水揚げ高が5位でありながら、売上高は第3位にある。これもあわび、ウニ、サザエなどの原価の高い貝類に恵まれているためであろう(日本離島センター1993)。漁師はほとんど自分たちの船を持ち、12~1月にかけては素潜り、2~6月は刺網、7~9月は素潜りであわび、さざえ、うにを採り、10~12月は刺網でイワシを獲るといふ。

つづいて、人々の生活の様子についてふれる。小倉からの公共交通機関は、1日3往復する定期船だけである。この船は小倉丸といい、昭和44年に完成したものである。定期船の乗組員もまた藍島の住民である。ただし、島民のほとんどが漁師であるため、定期船以外にも、自分の持ち船で街にわたることも可能である。

表2 産業別人口

産業別	人数	内容
第一次産業	157	漁業
第二次産業	2	建設業
第三次産業	2	電気・ガス・水道・熱
	7	運輸・通信
	5	小売・飲食・卸売
	20	サービス

(離島統計年報より作成)

観光客は釣り客が主で、夏には2万人近い人が訪れる(表3)。島内には3軒の日用雑貨店、4軒の民宿がある。また、定期船が人々の荷物を運搬する。1年前までは漁協経営の売店があったが、現在は職員不足のため休止状態にある。雑貨店で

は、簡単な食料品（ビール、ジュース、菓子等）しか揃わないため、人々は必要に応じて街に買い物にでる。郵便物は、浜崎氏が一手に引き受けており、小倉に出る際、島民の雑用（買い物、役所での書類提出、銀行での振込等）を代行している。

電気は、昭和42年に送電されるまでは自家発電で、夜の10時には電気が消えていた。水道は、昭和48年、海から汲み取る簡易水道が整備された。電話は昭和36年に、初めて小学校と漁協に設置され、現在ではほとんどの家庭に普及している。ちなみに電話局では若松区のアつかいである。近々、下水道が整備される予定で、そのためのパイプが完成に近づいている。

表3 季節ごとの観光客数

季節	人数(千人)
春	13.3
夏	19.9
秋	13.7
冬	9.6

(離島統計年報より作成)

島には診療所が1軒あり、週に1回医師が訪れる。救急の場合はヘリコプターが使われることもあり、そのためのヘリポートも島の中心にある。

島の子供は島内の保育園に通い、小学校は、明治31年に設立された古い歴史を持つ藍島小学校に通う。中学になると小倉にある城野中学校で寮生活を送り、週末になると親元へ帰る。その後はほとんどの者が高校に進学し、卒業後漁業を継ぐ者は少ない。

漁師の一日は午前3時に始まる。午前5時頃まで漁を続け、下関の市場に魚をおろす。漁から帰ってくるのは午前7時である。それから風呂に入り朝食をとる。片付けを済ました後は特にすることもなく、寝たり、酒を飲んだりと様々である。

夕食を済ませた後、午後9時には床につく。

その他、離島らしい風景として、ナンバープレートのない車（車両登録されていない車）が走っていたり、ネコが非常に繁殖し、平然と道路の真ん中にいすわっていたりする。また島には工場などの産業が存在しないので、騒音、公害は全くのんびりとしており、都会の生活とはかけ離れた印象がある。

先程も触れたが、島の人々は様々な肩書を持っている。漁業会長、PTA会長、町内会長、消防団長、危険物取扱責任者、教育推進委員長、青年団長といった具合である。しかも一人の人間が幾つもの役職を重複して引き受けているのである。島には、浜崎氏以外にもそのような人物が数人いる。

藍島には十七軒時代と呼ばれる時代がある（表4）。それは明治20年から昭和15年までである。十七軒の内訳は、両羽姓3戸、中村姓2戸、森本姓2戸、島田姓2戸、佐野姓、吉村姓、松下姓、上村姓、崎田姓、浜崎姓、西村姓である。大泊にある西谷姓を除いてその殆どが島の中心である本村に住居を構えている。これら十七軒は島のあらゆる所に共有地を持ち、島の行政、行事において常に中心的役割を果たしてきた。町内会長等は、この十七軒が持ち回りで務めていたという。また現在も門名と家印が残っており、各家の玄関や農具にそれらを見ることが出来る（北九州市教育委員会1968）。

本論文で対象としている浜崎氏も母親の連れ子から浜崎家の養子になったといういきさつはあるが、十七軒の1つである浜崎家の本家の長男である。即ち、代々引き継がれてきた旧家が多いこの島社会で、島に血縁者を持たず全く外部からいきなり本家の嫡男として彼は共同体に参加していくことになったのである。

表4 十七軒の門名・家名

氏名	門名
浜崎俊和	はまや(浜屋)
崎田清	さきね(先根)
森本久男	だいくや(大工屋)
両羽勝久	しんや(新屋)
両羽生男	ひがし(東)
上村博利	じげ(地家)
吉村吉孝	おもや(主居)
島田正美	まえのげ(前の家)
両羽丈一	ふるや(古屋)
島田藤男	かしや(菓子屋)
松下康弘	いんきょ(隠居)
西村久光	にし(西)
森本正春	むかい(向)
中村智也	なかね(中根)
佐野征一	へや(部屋)
中村豊	しんたく(新宅)
西谷家	彦島から移住

(藍島資料 藍島類似公民館より)

第3章 浜崎俊和氏のライフヒストリー

3-1 浜崎氏の生い立ち

浜崎俊和氏は、昭和3年5月14日生まれの69才、現在は小倉北区の藍島で、藍島・馬島郵便集配局長をつとめている。以下、彼の生い立ちを紹介し、藍島に来てからどのようにして島社会に関わってきたのかを検証する。

彼が生まれたのは、山口県厚狭郡山陽町埴生大字中村である。農家の息子だった彼には姉が一人いたが、彼が中学生の頃嫁に行き、現在はすでに亡くなっている。彼は12歳のとき、母親の再婚にともなって藍島にやって来る。当時、彼の母親はまだ35才で、夫と死別し、不憫に思った知人の紹介で縁談が成立したようだ。

彼は、島の旧家である十七軒のうちの1つ、浜崎家の長男として、養嫡子にむかえられる。ちな

みに、藍島では、長男が病弱または居ない場合には、養子を迎え、長男が成人すると養子を隠居させる風習もあると言う(吉永1960)。

彼は農家の子供であったので、漁を覚えたのは島に来てからだと言っている。島に来てからしばらくのあいだ、半農半漁の生活を送っていた浜崎氏は、折からの戦争のあおりを受け、17才の時、志願して広島県にある大竹海兵団に入隊する。当時は太平洋戦争の真っ只中であつたため、島から軍隊に行く人も少なくなかつたという。その中でも彼の軍隊にける思いは強く、大竹海兵団を出たあとは、神奈川県にあつた横須賀機関学校に進む。さらに同校卒業後、広島にある呉海軍工廠に勤務する。昭和20年8月6日広島市に原爆が投下されるも、呉にいたおかげで原爆を免れた彼は、終戦と同時に島へと戻る。

浜崎氏の人生を、生まれてから終戦までをひと区切りとするならば、軍隊に行ったことは彼にとって非常に大きな意味を持つと考えられる。なぜならば、彼は終戦後、軍隊で得た知識、人脈をもとに島社会に参与していくことになるからである。実際、彼も軍隊生活を思い起こして次のように語っている。

「今の若いもんで縦列行進なんかできるもんおらんじゃろー。気をつけゆうても、わしらの気をつけは手を前にくむんじゃー。手をうしろなんかに組んだら、気持ちがうしろむきじゃーゆうて怒られたよ。朝おきるときも、30秒で吊り床(軍隊の宿舎などで使用されていたハンモックのようなベッド)たたんで、身仕度までせにゃーならんけー大変よ、わしなんかはよー用意しようおもて、寝とうちから靴下はいとつたらひどう怒られたもんよ。」

「軍隊でいちばんうるそう言われたのは、5分前と15分前ゆうことよ。何事も15分前にはそ

の場に着いって、5分前には動ける態勢である、わしゃー、いまでもこれだけはぜったいまもる。することはきしとせにゃ一人に認められん。」

彼は軍隊生活を今でも誇りに思っており、その後の人生に影響を与えたことは間違いなさそうである。終戦を迎えるまでの浜崎氏の人生の中で、彼の環境を大きく左右する出来事は2つあったと考えられる。1つは母親の連れ子として藍島にやって来たこと、もう1つは、海兵団に入ったことである。そのどちらをとっても、彼の人生観を変えてしまうほどのものであったと想像できる。ところが、浜崎氏の口から語られるのは、もっぱら軍隊のことで、養子に来た詳しい経緯、浜崎家における苦労話などについては、こちらが聞けば答えるという程度であった。

終戦後、島に戻った浜崎氏は、漁業と農業で生計を立てていた。当時の島の生活の様子を彼は次のように語っている。

「当時の島は、もうなーんもないんよ。電気もガスも水道も、ランプ生活みたいなもんじゃった。夜10時になったら電気が消えるんじゃけー。娯楽もなかったけーつまらんよのー。」

この会話の後半部分で語られているように、娯楽がないということが、後に、彼がアコーディオンを始めるきっかけにもなった。

漁業に従事するかたわら、彼は昭和25年より水難救助会藍島支部に所属、救助手として、難破船の引き上げや、水難救助に一役買う。昭和26年、浜崎氏は、養子に入った浜崎家の長女であったキヌエと結婚する。浜崎家には男の子がいなかったため、彼が将来キヌエと結婚することは、最初からきまっていたという。「まあ、自然の流れじゃったねー」彼のこの言葉が、宿命的な結婚であったことをよく表している。

昭和38年、藍島に消防団が設置される。それ

まで藍島には消防団はなく、藍島は消防団の小倉区第一分団に、馬島は同第八分団に所属していた。昭和41年、分団改革により、小倉第29分団として藍島にも新しく消防団が設置された。浜崎はその団長に任命されたため、それまでやっていた水難救助活動は休止することになる。消防団長に任命されたことについて彼はこう語っている。

「物事きちっとできる人間じゃないと消防の仕事はつとまらんよのー。わしゃーそういう意味じゃー良かったかもしれん。」

彼には、海軍で得た自信と人脈、それに、水難救助を10年間勤めたという自負があったのだろう。

彼は、家庭用の消火器を島の全戸に普及させたり小学校の避難訓練に参加したりして地域の防災活動を一手に引き受けた。また、プロバガスを普及させ、その使用法を広めるとともに災害防止にも努めた。さらには、夏場のキャンプ場の巡視、夜警を実施するなど島の消防業務に献身奉仕した。昭和48年、北九州市が小倉南、北区、八幡東、西区に分割され、消防についても29あった分団が9つに減らされてしまう。その結果、藍島の消防団は他の地域と統合されてしまい、浜崎氏も消防職を離れることになる。

それと時を同じくして、浜崎氏は、郵便配達の仕事に就く。というのも、それまで藍島、馬島の2島に郵便物を配達していた馬島の老人が、引退したからである。たくさんいる島の人の中から、なぜ浜崎氏に白羽の矢がたったのだろう。彼は言う、

「そんなとき、候補は5人ぐらいおったかのー。やっぱり誰にでもできる仕事じゃないけー郵便局でも念入りに調査して、海軍もでとるし、消防の仕事もしとったけー信用があったんじゃろう。結局わしが委託職員ゆうことで、郵便配るようになったんよ。」

彼の経歴が村の中でも評価されている様子がこの会話からもうかがえる。本業とは別になるが、昭和45年、彼は妻と共に、釣り客相手の民宿「はまや」をはじめた。それまで藍島に宿泊施設はなかったため、彼は島で初めて民宿を始めた人物といえる。その後、民宿を経営する者が増え、一時は6軒にまでなった。しかし、「はまや」がその他の民宿と違ったのは、宿の主が「調理師免許」を持っているという点である。

「島の民宿で、調理師免許もつとるもんなんかおらんぞー。持つとるだけで信用が違う。家の壁に調理師免許はつとると、人の見る目が違うんじゃー。」

彼は、調理師免許という資格を取るにより独自性を追求し、さらには人々の信用を得ることを目指していたのである。

その他、浜崎氏が就いた役職には、子供育成会長、PTA会長、などが挙げられる。これまで、彼の功績に対して、小倉警察署、消防協会、藍島小学校、小倉海交会（海軍の退役軍人の集まり）から感謝状が送られている。浜崎俊和氏は、これまで、水難救助会、消防団長、郵便局委託職員といった実に責任のある仕事に就いている。しかも、彼がそれらの職に就けたのも、まわりの推薦による所が大きい。



藍島の港の様子

3 - 2 浜崎氏の日

ここで彼の一日の生活パターンを紹介する。朝7時藍島発の定期船で小倉に着くと、車で北九州中央郵便局に向かう。郵便局でその日の集配物を車のトランクに積んだ後は、街で人々に頼まれた雑用をこなす。買い物、お金の引き落とし、役所での住民票の取得、クリーニング、とその内容は様々である。数々の雑用をこなしたあと、浜崎氏は、10時30分小倉発の定期船で藍島にもどり、郵便物を配達する。彼は自転車を使って各家庭を回っており、郵便物を人々に直接手渡す。その際、彼は人々と簡単な会話をしたり、用を頼まれたりする。配達が終わると、家に帰り昼食をとる。彼は、藍島だけでなく馬島にも郵便物を届けるため、藍島13時30分発の船に乗り馬島に立ち寄る。馬島では徒歩で各家庭を回り、ここでも人々は街での用事を彼に頼む。すべての郵便物を配り終えると、小倉発14時30分の便で藍島へと帰るのである。島に帰ってからは、ジョギングをしたり、畑仕事、タコ壺漁などをして過ごすという。

漁師の一日というのは、先にも述べたように比較的のんびりしたものである。そんな中、浜崎氏は、小倉と藍島の間を一日2回も往復し、仕事の合間をぬっては、人々の雑用までこなしてしまう。彼の一日の生活を見れば、彼の真面目で律儀な性格が見てとれる。彼はかれこれ20年近くも郵便配達の仕事をしているが、その間には、色々なことがあったという

「1回の一、小倉で郵便局の赤い自転車とられたことがあっての一、えらいめにおうたよ。郵便局の中に取調べ室みたいなんががあって、手紙なんか無くしたら、そこでとことん追求されるんよ。わしもひどうにしぼられた。自転車も国のもんじゃし、島の人の手紙も入っとる。責任重大よ。現金書留なんか無くしたら、くびがとぶけーのう。」

あれ以来こわーなって、すぐ車の免許取りに行ったよ。トランクの中に入れときゃー安心じゃけーのー。郵便局は、車で通勤しちゃうーいけんのんじゃが、わしと局長だけは特別よー。」

自転車を盗られるとすぐ車を買うあたりは、彼の仕事に対する責任感の強さを感じることができる。さらには、人々の信用を失いたくないという気持ちも人一倍強かったのだろう。民宿の所でも出てきたが、ここにおいても彼の独自性へのこだわりをみることができる。

「わしゃー、定期船がいつ欠航したゆうのもすぐわかるように、ゼーんぶ証明書取って保管しとる。そうせんと、島のひとは、おかしいのー、郵便がこんのー思うじゃろー。そうゆう時のために証拠を残しとくんよ。」

彼は、これに限らず、島の主な出来事、自分のことが載った新聞記事などを丁寧に保存、記録しており、48年間毎日欠かさず日記をつけている。また民宿の客室の壁には、彼がこれまでもらった感謝状、賞状、記録状などが貼りめぐらされている。会話中の、「証拠を残す」という言葉からも分かるように、彼は様々なものを記録することにもこだわっていた。

3 - 3 芸能スポーツなどにおける浜崎氏の活動

芸能

次に、浜崎氏のの趣味、嗜好などをみていく。まず、彼は昭和25年、ラジオもなく娯楽の少ない島でアコーディオンとハーモニカを独学で始める。そして10年後の昭和35年、ヤマハ音楽教室で正式な教育を受ける。彼はイギリス製の高級アコーディオンをはじめ、数台のアコーディオンを所有している。初めて人前で発表したのは昭和29年、敬老会での席上でハーモニカを演奏した時のことである。独学で勉強していた彼だが技術

にはかなりの自信を持っていた。

「昔、小学校の音楽の先生が来ちゃって、アコーディオンを演奏してくれいうんで、わしゃー先生じゃけー とてもかなわんじゃろー思っとったが、わしが目の前で弾いて見せたら浜崎さんよくそんなに指が動きますねーゆうて誉められた。」

ところが、そんな彼でも、緊張する場面があったという。

「去年、小倉の市民芸能大会に呼ばれてのー。小倉のひびき荘であったんよ。もう、まわりはすごい有名人ばかりよ。もう緊張してのー。わしゃー断わるーか思ったが引き返せん。でも白いタキシード着てパリッと出ていったら、自分でもびっくりするぐらいうけて拍手もらってのー」

浜崎氏のもとには、以前にも増して老人会、病院、学校などから出演依頼がとびこむようになる。

「じいさんばあさんたちに一方的にきかしちゃうーいけん。一緒にうたわせんと。みんな子供に戻って一緒に歌うんじゃけー。」

浜崎氏は身なりの重要さについても語る。

「前、津和野に行ったとき、手品する人がおつてのー。見たらきたないかっこしとるんよ。あれじゃーただのおっさんよ。手品するんなら、パリッとタキシード着て山高帽でもかぶらにゃーダメよ。まだまだ素人よ。」

自分が白いスーツで観客にうけたことが良い教訓になっているのであろう。この語り口は後述するマラソンにおいて、彼がある人から忠告されることにも重なる。

「人間、その時その時にあった服装せにゃーいけん。」

これが彼の信念である。このアコーディオンという芸能を通して氏は村内において、またひとつの地位を築いたとは言えないだろうか。娯楽のない島で「アコーディオンといえば浜崎氏」とい

イメージをうえつけたことは重要だ。彼の仕事の変遷を見てもそうだが、

「誰もやらないことをやってこそ価値がある。そうじゃないと人から認められん。」

と言っている。島の人に尋ねても「あー、おっちゃんのアコーディオン、好きじゃけんねー」と、

すぐ口に出てくるほどだ。

マラソン
現在はマラソンの講師として各地の小学校や老人会で講演会を開くことも多い浜崎氏だが、彼がマラソンを始めたのは今から20年前、50歳の時である。元来スポーツ好きだったのと、知人から福岡の大濠マラソンに出てみてはどうかと誘われたのがきっかけだという。

しかし、当時の彼はたばこを一日に4箱も吸うヘビースモーカーであり、練習も休み休みだったという。そんな彼が初めて出たマラソンで、それまでの自分を見直す転機になる出来事に遭遇する。「わしゃー、スタート5分前に、上から下まで新品の揃えて、タバコくわえとったんよー。そしたら60ぐらいのじいさんが来て、大将、頑張んな

さい、ゆうて声かけてきてよー。わしゃー、なにいいよんじゃこのじいさん。スタートしたらすぐぬかしたるわい思いよったんよ。そしたら500mもしたらわし、息が切れてのー。あつというまにじいさんに抜かれてしもーた。結果はビリよ。そしたらゴールしたあと、じいさんに説教されたよ。

おい、大将、スポーツやるもんがタバコ吸うとは何か。わしゃー、その一言でやめた。じゃけー、今わしがマラソン行って、タバコ吸うもんみたら同じこというんよ。」

彼は「藍島走ろう会」の会長でもある。もっとも会員は彼ひとりだけであるが。

「わしが声かけても、だれもはいつてこんのじゃけー。」

来年一年だけで、広島宮島マラソン大会、天草パールマラソンなど、年に15回のマラソンに参加

表5 1998年・浜崎氏の出場予定マラソン一覧

1月13日	下関市長府城下町マラソン
2月第二日曜	山口県美祢走ろう会マラソン
3月第一日曜	秋吉台カルスト高原マラソン大会
3月10日	下関市内日健康マラソン大会
3月22日	津和野SL健康マラソン大会
3月第二日曜	天草パールマラソン
3月第三日曜	山口県宇部健康マラソン大会
4月第二日曜	山口県熊毛郡田布サクラマラソン大会
5月第三日曜	国東半島ほとけの里マラソン大会
5月第四日曜	佐賀県おぎホタルマラソン
10月第一日曜	山口県宇部ときわ公園健康マラソン
10月26日	筑豊さわやかマラソン
11月第一日曜	広島県みやじまマラソン大会
11月第四日曜	みやじまクロスカントリー全国大会
12月8日	徳山大津島ポテマラソン大会

している(表5)。これらのマラソンは毎週日曜にあるので、近い時は当日、遠い所は前日から泊まり込んで、アコーディオンを披露するのだ。彼の経営する民宿の一室には、彼が今までに出たマラソンの記録証が貼りつめられている。彼の練習場所もっぱら島内である。

「わしゃー、走ろう会いうのつくったんじゃが誰も入ってこんのじゃー。わし1人よ。」

「沿道に立って応援してくれたり、水もってたってくれたりするよ。あれが一番うれしいよ。対馬なんかすごいよ、あれがなかったらわしは走っとらん。」

常々、人に認められてこそと言い続ける氏の心が読みとれるような発言である。

その他の嗜好

「わしはくつ下は履かんのじゃ。これが一番足にいい。マラソン行って、すあしでくつはいとるやつなんかみたことないよ。医者に行ったら、浜崎さんの足のうらは40代みたいにやわらかい、いわれるよ。さすがに葬式の時ははくけどなー。」

「酒はいらん。ろくなことがない。酒のむとくずれるし、酒を飲む時とそうでない時の話はちがう。」

氏は、ふだん一切、酒を口にしないそうだ。また彼は日記も48年間、一日も欠かさずつけている。郵便局の所でもふれたが、島のこと、自分のこと、すべて記録をとっており、いつ、何があったかは彼の所へ行けばわかるようになっている。

「昭和24年に自家発電が始まったのー。じゃけー、夜の10時になったら真っ暗よ。水道は昭和48年、電話は昭和36年に小学校と組合についた。」

という具合に、正確に記録しているのである。その理由は、先程も述べたように、「証拠を残す」ということであると彼は述べる。

第4章 他の十七軒の有力者

これまで浜崎氏の発言を中心に取り上げてきたが、それらを別の観点から見る上でも、他の島民のことを紹介していく。

4 - 1 上村博利氏

はじめに登場するのは、上村博利氏である。彼は、藍島に古くから存在する十七軒の生まれで、祖先は定期船の管理を一手に引き受けていた。彼が5代目である。12人兄弟の長男であり、現在は漁業協同組合の会長、町内会長などをつとめている。

彼は小倉工業から学徒出陣し、神戸製鋼、旭ガラスに勤めた後、18歳で帰島、昭和20年、漁業協同組合の前進である漁業会を設立。4年後、現在の漁業協同組合協に発展する。町内会長を24年、漁協の理事を10年つとめている。全国離島会議などにも北九州代表として出席し、活発な意見交換をおこなっている。

最初に島に水道を引いたのは彼である。

「わしがずーっと島の中心からホースひっぱって引いたんよ。最初はみな何しよらんかゆうかんじやったが、あとから、みんなもらいにきてのー。」

村の漁村センターや集会所を建てたのも上村氏である。彼は浜崎氏と同様、危険物取扱甲の免許を持っており、昭和31年から24年間、船の燃料を売っていた。

漁協では北支部の会長を10年間、福岡県の三役でもあるという。

私は、漁協の会長はもうかるものかと聞くと、収入面でははずめの涙ほどだという。別段、お金のためにやっているわけでもなさそうである。漁業の将来についても、「これからは埋め立て地が中心になる。」と語っている。

上村氏も昔、島に娯楽がなかった頃、正月には島の人をあつめて、いろんな芸をみせる演芸会を開いたりしていたらしい。

彼が一番熱心に語ってくれたのは、死者が出た場合のことで、

「島で誰か死んだら、すぐうちに連絡がきて、わしが葬儀から埋葬、司会進行までぜんぶやるよ。」

葬儀屋なんか役に立たん。」

と語る。今までに、70人の葬儀をとりしまったという。

また彼は、消防団の小倉北区第7分団長もつとめたという。保育所の設立にも関わり、あらゆる面で島の中心的役割を果たしてきた。彼は、町内会長時代の思い出深い出来事として、ネコの捕獲を挙げている。

「ずっとやらにゃーいけんおもとったが、昭和20年に200匹に増えてからどうしようもなくなった。人がちかよってものにげんのんじゃけー。エサやる人もおるし。市の動物管理センターに頼んで捕獲してもらった。当時はテレビの取材もきた。そしたら、動物愛護団体から抗議がきてのー、大変だったよ。」

4 - 2 佐野清一氏

次に登場するのが島の歴史に詳しい佐野清一氏である。今年60才になる。彼もふだんは漁業に従事しているのだが、ひまをみて島の年表をつくり、大学教授が調査に来れば喜んで協力し、しかも小倉の歴史民俗博物館にも資料を提供している。私が読んだ藍島に関する資料にも、必ずと言っていいほど彼の名前が記してある。

「図書館に行くなら俺の所へ来い」が彼の口癖である。彼の父親が歴史に詳しく、それを引きついでいるうちに面白くなったという。島民も彼を、歴史のことなら佐野だと認めている。「島の歴史のことを話させたら1日中でも話す。」と人々は語る。実際、私も佐野氏に、島の古墳、土器、遺跡の発掘場所を案内してもらった。1、2時間の案内では不十分らしく、

「もうちょっと時間があつたら1日中でも案内したるがのー」と残念そうに語っていた。

4 - 3 森本一秀氏

さいごに若手の代表として、漁協の青年団長をつとめる森本一秀氏をあげる。彼は、若手から中年層まで支持が厚く、まわりから一目置かれる存在である。森本氏は、今の漁業について、

「藍島もほかに比べていいといわれるけど、自分の子供らのときまで安心して漁だけで食っていけるかわからん。これからはリゾートや観光も取り入れんとダメだ。昔はひと晩で100万ぐらいいなりよったがのー、今はダメよのー。藍島のまわりもだんだん汚れてきよる。漁業補償とかいいよるけどそんなんもらっても意味がない。長い目で見たら、金がかかっても海をきれいにすべきだ。」

という。

彼は現在37才、奥さんは小倉の街の人である。漁業のこと以外にも語っており、

「毎週の第3土曜日、小倉で球場かりて野球するんよ。今まで負けたことはないけどのー、みんないっつもぎりぎりまで人数がたりんのよ。携帯に電話したらもう飲みよるんよ。試合終わったらもちろん飲みに行くよ。みんなで焼鳥屋のビールからにしたことがある。スナックなんかにはアワビやサザエもって行くんよ、そしたらよろこぶのー。わしら自分の船があるけーいつでも帰れるんよ。」

「よー花嫁対策なんかしよるけど、藍島は街が近いせいとか花嫁には困つとらん。」

都市に近い離島の生活がうかがえるような発言である。

4 - 4 島社会における人間関係

以上、代表的な人を紹介してきたが、彼らは浜崎氏のことを、変わり者とは言いながらどこかで認めているふしが見うけられた。

彼ら3人を見て分かることは、それぞれが、なにかしら島社会において中心的な役割を果たしており、かつ非常な個性的な点である。かといって、お互いが争ったり牽制し合ったりしているわけでもない。むしろ島内での個人の役割を演じ分けているといえるだろう。例えば、島の歴史なら佐野さん、冠婚葬祭は上村さん、漁のことなら森本さんという具合である。まわりの人々の要望もあるのだろうが、本人たちも決して嫌々やっているようにもみえない。

このように、浜崎氏にかぎらず、ほかにも多くの肩書きを持つ人がおり、それぞれが個性的な人物であるという点は、島社会の共同体のありかたを考える上で大変興味深いことである。



旅館「はまや」にて（浜崎氏と筆者）

考察

水難救助会、消防団、郵便局、危険物取り扱い責任者など、彼の仕事の変遷を追ってみると、そこにはひとつの共通点が見えてくる。それはすべてがいわゆる公的機関に準ずるような内容を持っており、資格などの問題もあって、誰もができる仕事ではないということだ。彼が常々「人がやらないことをやってこそ」ということから、このことは証明できる。

彼は、島に母親の連れ子として来たのであり、

しかも養子としてその長女と結婚している。まず浜崎家の長男として認められなければならない。そして、さらに島社会で認められなければならない。この2つを満たすために、彼は、誰もがやらないことに挑戦していったのではないかと考える。軍隊の経験、人脈、これが結果的にプラスに作用したのであろう。

一つ不思議なことは、漁業が中心の藍島において、浜崎氏のこれまでの経験の中で、漁業に関するものはほとんどみられず漁協の役職にもついていない点である。他のものには独自性を求めるが、彼の口から漁業についてのこだわりが語られる事はなかった。彼は、藍島に来てからはじめて漁業を覚え、その将来に不安を感じたのかもしれないし、あるいは漁業では他の人々になわなないと感じたのかもしれない。島で最大の組織である漁協にはほとんどかかわらず、むしろ、島の生活の福利的な方面、電気・水道・郵便・エネルギー、娯楽といった、将来的に島に必要なものに目をつけ、着実に地位をかためていく。

こうした彼の先見性を他の住民たちも認めていったのだろう。彼が島社会に参加していく上で重要視したのは、「独自性」であり、その結果、仕事以外のマラソンやアコ・ディオといった趣味によってみずからの存在意義を見いだすのである。彼の部屋にある賞状、日記、それらは彼自身の大切な生きてきた証拠なのであろう。

私は、当初、彼の持つ肩書の多さに注目し、肩書きをもつことで彼は島社会に参加していったのではないかと考えた。たしかに、それは間違いではなかったが、分析するうちに表面的な事実過ぎないということが分かってきた。彼は、島において、誰にも真似できず、将来性があり、人々の信用を得られるものに目をつけた。それが消防で

あり、郵便であり、水難救助である。

先ほども述べたが、藍島では「島の歴史といえ
ば佐野さん」といった、いうなれば個人を代名詞
化する傾向がある。浜崎氏も現在至るまでに、「

といえば浜崎氏」というものを数々作り上げて
きた。郵便、消防、マラソン、アコーディオン等々。
浜崎氏にこのような代名詞が使われるということ
自体が、彼が島社会において認められていること
につながるのである。個人の役割が公に評価され
がちな小さな島社会において、彼は自らの役割を
人々にはっきり認識させたのである。

「誰もやらない独自性を追求すること」、「自分
の役割を人々に認識させること」。浜崎氏は島社会
の特徴を理解し、人々の信頼を得ることで島社会
に確固たる地位を築いてきたと考えられる。

謝辞

本稿を作製するにあたっては、たくさんの方々にお世話になるとともに多大な迷惑をおかけいたしました。

まず、本論文の対象にさせていただいた浜崎俊和氏には、お忙しい中、長期間にわたり調査にご協力頂きましてありがとうございました。調査をすすめていくうちに浜崎氏の生き方に私自身大きく影響され、つねに前進する姿や物事を記録していくことの大切さを学ばせていただきました。

また、島に滞在中、藍島の森本一秀夫妻、森本さんのお母様には、いろんなものをふるまってくれました。島の人を紹介していただき、漁にも一緒にさせてもらいました。

島の歴史をご指導くださった佐野清一氏、漁協会長の上村博利氏からも大変重要なお話をうかがうことができました。朝早くから貴重な時間をさいて下さり、感謝しております。

北九州大学文学部学ゼミの山中さやか様、白武佳子さんにも、力になってもらうと同時に大きな負担をかけてしまいました。私の配慮が足りなかったことをお詫びいたします。

ライフヒストリーを学ぶにあたって、同大学文学部、比較文化学科の重信幸彦助教授には参考文献などを紹介して頂きました。その後の作業を進めるうえで大きな指標となりました。

文章作成にあたって、数々の方にお世話になりました。ワープロを貸して下さったモスバーガーの下田邦子さん、ワープロを教えていただいた、国立小倉病院の猿渡マリコさん、北九州大学人間関係学科の具志堅伸隆君にも、夜遅くまでつきあっていただきました。

最後になりましたが、私の指導教官であり、文学部助教授の竹川大介先生に、ふたこと、お礼を

述べたいと思います。フィールドワーク研究ということで、不慣れな面もあり、色々ご迷惑もおかけましたが、実際やってみると想像力をかきたてられ、自分にとっても非常に貴重な体験でした。これまで、なにごとく中途半端な自分でしたが、この論文に取り組んだことで、何かが変わりました。本来の自分の姿を取り戻したとも言えますでしょうか。

今まではやるべきことさえからも逃げていた私ですが、今回に関しては、求められる以上の事をやってやろうという気になったのです。「好きこそものの上手なれ」という諺があります。私もこれまでこの考えを信じており、どこかで自分のからにとじこもっていた感がありました。しかし、今回あえて自分には向いてないと思いこんでいた、フィールドワークに取り組むことにより、真の意味での充実感を味わうことができました。その意味でも、私にこのような試練を与えてくださった先生には深く感謝しております。

以上をもって謝辞とさせていただきます。

「参考・引用文献一欄」

- 江藤正美 1957「藍島」『野外調査・第3集』福岡学芸大学小倉分校地理研究部
 小倉市教育委員会社会教育課文化係 1960「藍島」『藍島文化財調査記録集』 小倉市
 佐藤健二 1995「ライフヒストリー研究の位相」『ライフヒストリーの社会学』 弘文堂 13-42
 谷富夫 1996「ライフヒストリーとは何か」『ライフヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社 3-30
 中野卓 1977『口述の生活史』 御茶の水書房
 中村穰徳 1980『藍島資料 藍島類似公民館』
 日本離島センター 1992『離島統計年報』
 ケン・ブラマー 1991『生活記録の社会学—方法としての生活史研究案内』光生館
 吉永愚山 1960「藍島・馬島・島めぐり」『門司郷土業書・第10集』門司郷土会
 L・L・ラングネス、G・フランク 1993『ライフヒストリー研究入門—伝記への人類学的アプローチ』
 ミネルヴァ出版

資料 浜崎氏と藍島の略年表

西暦	年齢	「浜崎氏の略年表」	西暦	「島の主な出来事」
1928	0	山口県厚狭郡山陽町に生まれる。		
1940	12	母親の再婚に伴って藍島に移住。		
1944	16	大竹海兵団に入隊。		
1945	17	横須賀機関学校に進学。 呉海軍工廠に勤務。 終戦と同時に帰島。	1945	漁協の前身である漁業会が発足。
			1949	家庭用自家発電が始まる。 漁業共同組合発足。
1950	22	水難救助会に参加。 ヤマハ音楽教室でアコーディオンを習う。		
1951	23	妻、キヌエと結婚。		
1954	26	人前ではじめてアコーディオンを演奏。	1961	電話が、小学校と漁協に設置される
			1963	藍島に消防団設置。 本村、大泊間にトンネル開通。 北九州市になる。
			1964	診療所が開設される。
			1965	町内子供育成会発足。
1966	38	消防団団長に任命される。	1967	電気が送電される。
			1969	定期船、小倉丸完成。
1970	42	民宿「はまや」をはじめ。	1973	簡易水道がひかれる
1973	45	郵便局委託職員となる。		
1977	49	マラソンをはじめ。		

